

姫君たちの退場：『栄花物語』巻八「はつはな」伊 周の遺言の周辺

二宮，愛理
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4402939>

出版情報：文献探究. 58, pp.11-26, 2020-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

姫君たちの退場 —— 『栄花物語』 卷八 「はつはな」 伊周の遺言の周辺 ——

二宮 愛理

はじめに

いつの世も、親は子より先に死ぬものであるが、子を遺して死ぬ親の不安や心配もまた、いつの世にもあるものである。平安の世も例外ではない。現存最古の歴史物語『栄花物語』には、死期を迎え、妻子を遺して最期を迎える父親たちの姿が描かれている。

中でも、卷八「はつはな」での、藤原伊周の死を前にした家族への訓戒の場面は、一家全体が重苦しい絶望の雰囲気をもとっている。二人の娘、息子道雅、北の方を前に、もう長くはないことを匂わせ、没落による苦勞や屈辱を予想し、今後の身の振り方、自らの後悔を子供たちに懇々と語り掛ける体で物語は綴られている。二人の娘はまだ結婚前の身であるが、その結婚を世話すべき父である自分は、今日とも明日とも知れぬ身である。頼るべき母（伊周北の方）も、子供の世話役として頼みのできるような人ではない。入内を夢見て大事に育てた娘たちは今後どうなってしまうだろうか。そんな嘆きの言葉に続いて、伊周が時勢について述べた「今の世のこととして、いみじき帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり」という一節がある。「昨今は、貴き帝の御息女や太政大臣の御息女といへど、みんな宮仕えに出でし

まうようだ。同じように自分の子供たちも身を落としてしまうのだろうか」、という危惧に加えて、「そうなたら自分の恥だから何とか踏みとまってくれ」というのが伊周の最後の願いであった。

卷八「はつはな」は、その中関白家没落の仕上げともいうべき伊周の死——道長に対抗しようとした最後の相手の死が描かれる。『栄花物語』を読み解く上で、伊周の死とその遺言の描かれ方を追究することは、作品全体を考察する上でも重要であろう。本稿では、伊周の遺言に注目し、伊周をはじめとする中関白家、及び藤原為光とその娘に対しての『栄花物語』での描かれ方の一端を明らかにする。

なお、『栄花物語』を始めとする古典作品の引用は特に断りのない場合、新編日本古典文学全集（以下、新編全集と略称）により、冊数と頁数を付記した。引用文中の傍線等は特に断りのない場合、引用者による。旧字、旧仮名遣いを一部改めたところがある。

一、伊周の遺言場面

■ 伊周の遺言

卷八「はつはな」は、『栄花物語』の中で最も長編であり、その名の通り「栄花の初花」たる敦成親王の誕生を描いた巻である。その一方で、道長との政争に破れた伊周の最期を描く巻でもある。松村博司氏⁽¹⁾は本巻を三部構成と見て、第一部は彰子の懐妊まで、第二部は敦成親王誕生記、そして第三部は、皇子誕生に対する伊周の嘆きから遺言と死を経て、一条天皇の讓位思案で巻が締め括られるまでとしている。本稿で注目する伊周の遺言はこの第三部に当たるとする。また、松村氏は第三部の主要記事を「伊周の晩年と薨去」「中宮彰子引続き皇子出産の事」「具平親王女隆姫と頼通の結婚」「尚侍妍子東宮御参り」と大別し、伊周家に関わる一連の関連記事は、「卷八全体の中においては、道長関係記事と明瞭な明暗の対照を見せるような文学的構成が意図されているものである」と述べている。以下、内容で区切りつつ遺言の内容を紹介する。伊周の遺言は子供と妻に語りかける台詞の体裁で書かれている。

年もかへりぬ。寛弘七年とぞいふめる。よろづの例の有様にて過ぎもて行くに、帥殿は今年となりては、いとど御心地重りて、今日や今日やと見えさせたまふ。何ごとも月ごころしつくさせたまへれば、今はいかがすべきと思し嘆き、さるは一昨年よりは、御封なども例の大臣の定に得させたまへど、国々の守も、はかばかしくすがやかに奉らばこそあらめ、いといとほしげなり。御心地いみじうならせたまへば、この姫君二所、蔵人少将とを並め据ゑて、北の方に聞えたまふ。(1…四四八頁)

『栄花物語』卷八「はつはな」の後半、時は寛弘七年(1110)、道長との政争に破れ、中関白家の巻き返しはもはや絶望的な状況である。藤原

伊周の病状は悪化し、地方からの税収もはかばかしくない。そんな状況について草子地、語り手部分は、傍線部で「たいそうお気の毒である」と言っているように同情を示している。そして、伊周は体調も優れず、自らの死を悟ったのか、三人の子供たちと妻を並べて遺言とも訓戒ともいえるものを語る。

「己なくなりなば、いかなるふるまひどもをかしたまはんずらん。世の中にはべりつるかぎりには、とありともかかりとも、女御、后と見たてまつらぬやうはあるべきにあらずと思ひとりて、かしづきたてまつりつるに、命耐へずなりぬれば、いかがしたまはんとする。今の世のことで、いみじき帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり。この君達をいかにほしと思ふ人多からんとすらんな。それはただ異事ならず、己がための末の世の恥ならんと思ひて。(1…四四八頁)

伊周の長い台詞部分が始まる。これが本人の言であるか、実際に本人が言ったものとしても一字一句違わないほど正確に伝えられているかなどは一旦おくとして、言っている内容やその表現には臨場感があつて非常に写実的であると言えよう。二人の姫君を前に、「今の世は貴人の娘たちもみんな(宮仕え)に出るらしい」「娘たちを女房に欲しいと思う人は多かるう」と娘たちの将来や結婚について危惧する。また、娘たちに不本意な結婚があったとすれば、「世間には自分の采配と思われるだろう」と語るところを見ると、娘たちの将来を心配していると思われる一方、自分の不名誉への心配が伺える。

ここで伊周は、ゴシックで表記した部分で、「今の世の中では、高貴

な帝の娘や太政大臣の娘もみんな宮仕えに出て行く」という内容を述べる。ここでいう「宮仕え」は、貴人の家に使用人として仕えるという意味と思われ、内親王や大臣家の女でさえも使用人に身を落とすこと、自分の娘たちもそれに類するものとして考えられること、そしてそれが自分の死後の恥であることを言つたものであろう。

男にまれ、何の宮、かの御方よりとて、こともよう語らひよせては、故殿の何とありしかばかかるぞかしと、心を遣ひしかばなどこそは、世にも言ひ思はめ。母とておはする人、はたこの君達の有様をはかばかしく後見もてなしたまふべきにあらず。などて世にありつるをり、神仏にも、『己があるをり、先にたてたまへ』と、祈り請はざりつらんと思ふが悔しきこと。ざりとて尼になしたてまつらんとすれば、人聞きもの狂ほしきものから、あやしの法師の具どもになりたまはんずかし。あはれに悲しきわざかな。まろが死なん後、人笑はれに人の思ふばかりのふるまひ有様掟てたまはば、かならず恨みきこえんとす。ゆめゆめまろがなからん世の面伏、まろを人に言ひ笑はせたまふなよ」（1…四四八〜四四九頁）

その彼の懸念の原因のひとつと思われるが、子供たちの後見人として頼るべき母親（伊周北の方）が当てにならないことを嘆く。こんなことなら自分の目が届くうちに「子供たちを先に死なせてくれ」と神仏に頼めばよかったのだ、と後悔を語る。そうは言っても、娘を尼にしたところで不安が晴れるわけでもなく、伊周は娘たちに言い聞かせることしかできない。

など、泣く泣く申したまへば、大姫君、小姫君、涙を流したまふもおろかなり、ただあきれておはす。北の方も答へたまはん方もなく、ただよよと泣きたまふ。松君の少将などを、「とりわきいみじきものに言ひ思ひしかど、位もかばかりなるを見置きて死ぬること。われに後れていかげせむとする。魂あればざりととは思へども、いかにせんとすらんな。いでや、世にありわづらひ、官位人よりは短し、人と等しくならんなど思ひて、世にしたがひ、ものおぼえぬ追従をなし、名簿うちしなどせば、世に片時あり廻らせじとす。その定ならば、ただ出家して山林に入りぬべきぞ」など、泣く泣く言ひつづけたまふを、いみじう悲しと思ひまどひたまふ。げにことわり悲しともおろかなり。（1…四四九〜四五〇頁）

そんな伊周の訓戒に対して、娘たちや北の方も泣くことしかできない。そして次に「松君の少将」すなわち息子道雅に訓戒の対象が移る。娘たちに対しては「結婚や宮仕えで恥をかかせないように」という話が主立ったものだったが、息子に対しては、「官位を追い求める余り、他人に追従をするな」という訓戒である。娘たちに対しては「尼にしても駄目だ」という結論だったが、息子に対しては「出家して山に入れ」と具体的に出家を推奨している。

■ 伊周の娘たちの結末

伊周の台詞はここまでで、続けて隆家が伊周を励ます様子や、定子所生の脩子内親王と敦康親王が伯父の容態を心配する様子、伊周の妻子の為人の描写がある。そしてついに正月二十九日に死去したとの記事

で、中関白家の話題は一旦途切れる。しかし悲劇はそれだけでは終わらず、同巻の終盤、伊周が懸念していたことが早々に現実となってしまう。

かの帥殿の大姫君にはただ今の大殿の高松殿腹の三位中将通ひきこえたまふとぞいふと、世に聞えたり。あしからぬことなれど、殿の思し掟てしには違ひたり。中将いみじう色めかして、よろづの人ただに過ぐしたまはずなどして、御方々の女房にもものたまひ、子をさへ生ませたまひけるに、この御あたりにおはし初めて後は、こよなき御心用ゐなれど、なほをりをりのもの紛れぞ、いと心づきなうおはしける。あはれに心ざしのあるままによろづにあつかひきこえたまへば、仕まつる人もうち泣き、女君も恥づかしきまで思しけり。母北の方、もとより中の君をぞいみじく思ひきこえたまへりければ、よろづにこの御ためにはおろかなるさまに見えたまひける。(1…四五九頁)

二人の姫君のうち、年長の大姫君の方に、道長の明子腹の息子頼宗が通い始めた。道長家への配慮からか、「あしからぬこと」や「こよなき御心用ゐ」などと肯定的な見方をする一方、頼宗の好色性をフオローし切れていない点や、「伊周が訓戒していたことには背いてしまった」と伊周の立場から見た物言いもされている点にも注目される。また、伊周の目算通りとする意図なのか、「当てにならない」と心配していた母北の方の無策の様についても描写がある。加えて、大姫君に続いて妹の中の君のその後まで、巻八で完結してしまう。

中の君をば中宮よりぞたびたび御消息聞えたまへど、昔の御遺言

の片端より破れんいみじさに、ただ今思しもかけざめれど、目やすきほどの御ふるまひならばさやうにやと、心苦しうぞ見えたまひける。あはれなる世の中は、寝るが中の夢に劣らぬさまなり。

(1…四六〇頁)

右の引用からそのまま続いている本文である。妹には中宮彰子からたびたび「手紙」があったという表現がされているが、これが女房出仕の要請であることは、続く「昔の御遺言の片端より破れんいみじさ」という語からも明らかである。「御ふるまひ」を『栄花物語全注釈』と新編全集は「お取り扱い」「お扱い」と、彰子側の待遇のように訳すが、こゝは「難のない身の振りであるならば」と中の君本人の挙動と解せる。遺言の手前、今のところは考えられないとは言いつつも、話が進みそうな様子を見せている。とはいえ、伊周の遺言に背いていることには重点が置かれ、世の儂さを思わせる表現がなされている。心苦しと「見えなさっている」主体は、前の部分から続いていると見れば中の君本人ではなく、娘を用人に落とさねばならなくなった北の方であろう。

また、『栄花物語全注釈』によるとこの部分には異同があり、反映させると以下になる。重要な部分に傍線を付し、仮名遣いなど大意に影響のないものは新編全集の校訂に従い、濁点などは筆者が補った。

中の君は、中宮よりぞたびたび御消息聞えたまへど、昔の御遺言の片端より破れんがいみじさに、ただ今思しかげさんめれど、やすきほどの御ふるまひならばさやうにやと、心苦しうぞ見きこえたまひける。あはれなる世中は、寝るが中の夢に劣らぬさまなるに、

富岡本では「夢のような世の儂さ」の形容から、次の話題（敦道親王薨去）に続いている。こちらの本文では、「気楽な程度の身の振りならばそのように」という条件になり、「北の方が我が子中の君に対して」つらいと感じていることになろう。富岡本の方が梅沢本よりも姫君本人に対しての気遣いがあるように思われる。

二人の姫君はこれ以降『栄花物語』に登場することはほとんどない。大姫君は次の巻九「いはかげ」で頼宗との子を出産する場面がある。巻八「はつはな」で頼宗が通つて来ていた話の後日談で、二人の間には早くも子が生まれている。

かくいふほどに、故帥殿の姫君には、高松殿の二位中将住みたまひければ、このごろぞ御子に生みたてまつりたまへれば、いみじううつくしき女君におはすれば、殿は后がねと抱き持ちて、うつくしみたてまつりたまふ。七日がほどの御有様かぎりなく、御方々よりも御とぶらひどもあり。殿の御前はたさらなり、よろづに知りあつかひきこえさせたまふ。あはれ、帥殿のいみじきものにかしづきたまひきを思し出づるにも、これわろき振舞にはあらねど、世にかぎりなき御有様に思し掟てしものをと、まづ思ひ出できこゆる人々多かり。詳しき御事も、世の騒がしき営みなれば、え書きつくさずなりぬ、推しはかるべし。この君生れたまひて後は、内裏、殿などに参りたまふも、暇惜しう思されてなん。（1：四七九〜四八〇頁）

これも巻八の時と同様に、伊周家側の無念と道長家側の厚遇を混在させる書きぶりで、「悪い身の振りではないが」というように、母北の方が気にしていた「ふるまひ」という観点で大姫君の結末を語っている。

一方の中の君にいたっては、女房の一人として名前が挙がったり出仕の待遇の参考として言及されるのみであって、『栄花物語』における姉妹の物語はここであっけなく終わっている。

■ 問題の所在

さて、注目したいのが、冒頭にも述べたゴシック部分である。この「今の世のこととて、いみじき帝の御女や、太政大臣の女といへど、みな宮仕に出で立ちぬめり」という部分は、「高貴な女性が使用人として家に仕える」という世相について言及しているものと思われる。素直に読めば、「最上級のクラスの女性たちでさえ宮仕え（貴族の家庭で使用人として働くこと）に出て行くらしい。道隆の孫であり、伊周の正妻腹の娘である二人は、教養もたしなみもしっかりしているだろう。それを目的に、自分の死後、娘たちを手に入れたがる者が大勢いるだろうし、二人はそれに抗えず使用人に身を落としてしまふに違いない」といった伊周の危惧が伺える。

まず、ここで、出で立ちぬ「めり」と、伊周が「推定・婉曲」を用いていることに注目したい。小田勝氏⁽³⁾は「推定」について、「証拠性をもって成立した認識」と定義している。また、助動詞「めり」については、「視覚によつて事態を推定する意を表す」もので、「話し手の主観的な判断に偏ることになる」としている。つまり、個人的、主観的な判断ではあるが、彼の中には何らかの根拠があつてこのように言つたと考えられるのである。

ここで一つ疑問が浮かぶ。伊周の発言に彼なりの判断基準があつたとして、それは一般的に妥当なもので、伊周の独りよがりな外的な心

配ではなかったのだろうか、ということである。というのも、『栄花物語』の失脚前の伊周は、その愚行とも言える失政を描かれている。長徳元年（963）、巻四「みはてぬゆめ」で、道隆の死が四月十日と明記された直後に、「人の衣袴の丈、伸べ縮め制せさせたまふ」の記事が挟まれるのはその好例である。それに続く記事は四月二十三日の済時の薨去なので、当然まだ道隆の四十九日すら済んでいない時点で据えられた記事であるが、実際は、この宣言はこの約三か月後、七月に至ってから出されたものである^③ので、これは明らかに作作的な挿入である。新編全集は「道長が内覧となつてからのこと。この制に伊周が関与したかどうかは不明」（1:211頁）とさえ見る。彼の遺言は、これと同様に、伊周の愚かさや疑心暗鬼を示すような『栄花物語』の手法ではないかと疑われるのである。

結論から言えば、先に述べたように伊周次女は彰子の女房になり、『栄花物語』内では他にも「貴女の宮仕え」の例が散見されるので、伊周の読みそのものは全く正しいものとして書かれていることになる。しかし、そうやって「太政大臣の女」の例はあるものの、「帝の女」はどうであろうか。帝の孫なら源道方女（醍醐帝孫／寛子女房）、敦平親王女（三条帝孫／禎子女房）など実例が見つかるが、内親王が人に仕える身分になるというのは『栄花物語』^④に一例あるものの他資料では確認できず、少々言い過ぎの感がある。

「物語」という性質上、この台詞が史実とは異なる「演出」、つまりフィクションであることは当然考えられる。この台詞が伊周の実際の発言を伝えていたとしても、または他の誰かによる脚色や創作であったとしても、『栄花物語』での伊周のエピソードを享受する上で、このように「推定」の助動詞でもって書かれた「主観的根拠」、すなわち具

体例を探ることは無駄ではないだろう。有力な「根拠」が実際の史実において発見できる場合は、『栄花物語』の作者、及び読者は、それによる具体的なイメージをもって彼の遺言を受容したはずである。

はたして『栄花物語』の意図はどこにあったのか。実際の寛弘七年時点の女性たちの宮仕え事情はいかなるものであったのだろうか。次節では、伊周が遺言で述べる「宮仕えする貴女」の実際の例が如何なるものか検討する。具体的には、古記録の類から「太政大臣の女」が宮仕えに出た例を探し、『栄花物語』の記述と照らし合わせ、『栄花物語』を讀む上での実例として想定できるか否か、考察を進める。

二、太政大臣の女

■ 藤原為光とその女

本節では、「太政大臣の女が宮仕えに出る」ことについて、史実の例を確認していく。手順としては、まずこの点について指摘している松村博司氏の先行研究を参照し、指摘されている人物について、古記録の記述、『栄花物語』での描かれ方を参照する。

太政大臣―おほとの大匠〔富〕（『栄花物語全注釈二』参照）

富岡本は「おほと」と尊称でいわれるような人や大臣などの意。

「おほと」に太政大臣を含めるならばそれでもよい。

（『栄花物語全注釈二』 五五九頁校異考）

太政大臣為光の女五の君は三条后妍子の女房となるような例がある。
（『榮花物語全注釈二』 五五九頁語釈）

取り上げた部分には異同があるが、松村氏が言うように、「おほとのは太政大臣のほか大臣クラスの間を指し、大意に影響なしと考えられるので、今回は詳しく扱わない。そして、松村氏は「太政大臣の女」の例として、藤原為光の五女が道長の娘妍子の女房になる例があることを指摘している。

まずは父である藤原為光について、『公卿補任』^(五)の正暦三年の記事では、彼は正暦三年に死去し、諡は恒徳公、法住寺の建立によって法住寺殿とも呼ばれているとある。太政大臣までのぼった人物で、正一位を追贈されている。為光は師輔の九男で、道長たち兄弟から見ると叔父に当たるため、為光女たちと道長は従兄弟ということになる。為光女たちについて、『大鏡』は以下のように記述している。

御男子七人・女君五人おはしき。女二所は、佐理の兵部卿の御妹の腹、いま三所は、一条撰政の御女の腹におはします。男公達の御母、皆あかれあかれにおはしましき。女君一所は、花山院の御時の女御、いみじう時におはせしほかに、うせたまひにき。いま一所も、入道中納言の北の方にてうせたまひにき。（中略）まこと、一条撰政殿の御女の腹の女君達、三・四・五の御方。三の御方は、鷹司殿の上とて、尼になりておはします。四の御方は、入道殿の俗におはしまし折の御子うみて、うせたまひにき。五の君は、今の皇太后宮にさぶらはせたまふ。（『大鏡』為光 一三〇頁）

『大鏡』によると、五人の娘のうち上の二人はそれぞれ花山天皇と入道中納言（藤原義懐）の妻となり、亡くなったという。三、四、五女は同母姉妹であり、三女は鷹司殿（源雅信）の妻になり、後に尼になった。四女は入道殿（藤原道長）の出家前にその子をなしたが亡くなった。五女は皇太后宮、すなわち三条天皇中宮であった妍子に女房として出仕したことが語られている。宮仕えを経験したのは四女と五女であるようだ。

『尊卑分脈』の記述はこれらと照らし合わせると概ね一致しているが、系図に書かれた五人の女子のうち、五番目の女子には「隆家卿室」^(六)と傍記がある。一方、「この外女子二人／一人皇后宮女房／一人安木守家平室」との記述が見られるので、『大鏡』が「五の君」とする人物は、この系図外の「一人皇后宮女房」であるのだろう。為光女のうち、隆家や家平の妻になったという人物は、『榮花物語』『大鏡』ともに見えない。

次に、為光女たちを古記録の類で追うと、父為光を失ったのちの姉妹の動向が僅かながら分かる。その流れを表1にまとめた。まず正暦三年（992）の父為光の死から三年後、『日本紀略』長徳元年（995）二月七日の記事には「今夜。故太政大臣家焼亡」^(七)とあり、娘たちの居所と思われる為光邸が火災に遭っていることが分かる。更に『権記』^(八)によれば、長徳四年（998）十月二十九日の条に、一条殿は女院詮子の手に渡っていることが分かる。その後、娘たちの動向は二十年ほど不明であるが、長和四年（1015）、四女と五女が道長家の「家子」すなわち「道長家に属する妻子及び使用人」となっていることが『小右記』によ

って分かる。為光女たちが道長家に出仕することは『栄花物語』や『大鏡』でも語られていた。しかし、為光邸焼亡以降の空白のせいで、四女と五女の正確な道長家出仕の開始時期は不明である。

年	月日	できごと	典拠
992 (正暦3)	6月16日	為光薨	補
995 (長徳元)	2月7日	為光邸焼亡	紀
998 (長徳4)	10月29日	詮子、為光邸を入手	権
1001 (長保3)	2月10日	詮子、東三条院に遷御	権
1010 (寛弘7)	1月29日	伊周死去 (遺言?)	権
1015 (長和4)	9月20日	為光女、道長家子として叙位	小
1016 (長和5)	1月21日	為光女死去 (公信同腹)	小
	4月24日	道長、妊娠者により賀茂参詣せず	小
	6月15日	道長、妊娠者により祇園参詣せず	小

表 1 為光女関係年表

(補：公卿補任、紀：日本紀略、権：権記、小：小右記)

そして長和五年(1016)正月二十一日、春宮大夫齊信卿の妹の死亡記事が『小右記』(九)に見られ、更に同日、『御堂関白記』(二〇)では、物忌のために道長が外出せずに齋食に努めたという旨が記録されている。

『小右記』では、参議藤原公信と同腹の妹が懐胎中に亡くなったという旨を述べており、公信の母は伊尹女であるから『大鏡』によれば三、四、五女の同母兄弟である。五女はこれ以降も「五君」という名前が見えるので、これは三女か四女の死亡の記述であるうが、『御堂関白記』の物忌を思えば、これは家子であった四女が家中で死んだことを受けて、その喪に服すためかと考えられ、四女の死亡記事ではないかと思われるのである。

ちなみに、道長の寵を得たのは四女だけではなかった。その後、『小右記』が「法住寺太相府女懐妊、世号五君(二二)」と、同じく道長家に仕えていた五女の懐妊を伝えている。その様は十六箇月に及ぶ異常な妊娠である。恐らくは道長の子であろう。その後、古記録の類では彼女がどうなったのか不明であるが、『栄花物語』ではこの後も女房として名前だけは登場している。

■ 『栄花物語』における為光女

では、『栄花物語』では、為光女たち——特に四女と五女はどのように書かれているのだろうか。巻四「みはてぬゆめ」で、為光の死去に際して子女に言及された部分では、まず四、五女の容貌について述べられている。

女君たち今三所一御腹におはするを、三の御方をば寝殿の御方と聞えて、またなうかしづききこえたまふ。四、五の御方々もおはすれど、故女御と寝殿の御方とをのみぞ、いみじきものに思ひきこえたまひける。「女子はただ容貌をおもふなり」とのたまはせける

は、四、五の御方いかにとぞ推しはかられる。 (1…190頁)

三女に比べて、四女と五女は父為光からの愛情はさほど深くなかったようである。その理由を、『栄花物語』は遠回しに容貌のせいであろうと推察している。その後、『栄花物語』には、為光邸である一条殿を相続したのは、とりわけ父の鍾愛を受けていた三女で、それ故に彼女は「寝殿の上」と呼ばれるようになったとある。この三女は、巻四で、藤原伊周が通っていたことが語られている。

かかるほどに、一条殿をば今は女院こそは知らせたまへ、かの殿の女君たちは鷹司なる所にぞ住みたまふに、内大臣殿忍びつつおはし通ひけり。寝殿の上とは三の君をぞ聞えける、御かたちも心もやむごとくおはすとて、父大臣いみじうかしづきたてまつりたまひき、女子はかたちをこそといふことにてぞ、かしづきこえたまひける、その寝殿の御方に内大臣殿は通ひたまひけるになんありける。

かかるほどに、花山院この四の君の御もとに御文など奉りたまひ、気色だたせたまひけれど、けしからぬこととて聞き入れたまはざりければ、たびたび御みづからおはしましたつ、今めかしうもてなさせたまひけることを、内大臣殿は、よも四の君にはあらじ、この三の君のことならんと推しはかり思いて、… (1…228…229頁)

三女は詮子に一条殿を譲り、鷹司殿というところに住んでいた。そこへ伊周は通って来ていたようなのだが、同じころ、四の君には花山院が恋

文を送り、誘いをかけていたようである。この後、伊周が起こした花山院放射事件に『栄花物語』の記述は続く。史実ではまだ一条殿に居たようであるが、『栄花物語』での年次によると、三女はこの時既に鷹司殿に移っていることになっている。まだ結婚に至っていないかたつと考えられる四女と五女も、『栄花物語』では同所に身を寄せていたということになっているのだろう。

こうして男たちの争いに巻き込まれた四女は、古記録では長和四年(1015)まで動向が不明であったが、『栄花物語』ではもう少し早い段階で消息が語られる。伊周隆家兄弟の左遷と復帰の騒動も過去のものとなり、彰子の入内、定子の死去を経て、いよいよ道長の天下が目前に迫った頃、物語は巻八「はつはな」に至っている。年次で言うところと寛弘六年(1009)の時点に、道長夫妻から四女に出仕のお呼びがかかるという記述がある。

かの花山院の四の御方は、院うせさせたまひにしかば、鷹司殿に渡りたまひにければ、殿聞しめして、かれをもがなとは思しめしけれど、思しもたためほどに、殿の上ぞつねに音なひきこえさせたまひけれども、いかなるべいことにか、思し立ちがたかりけり。 (1…

四三四頁)

恋人だった花山院が亡くなって頼る相手がいなかったのか、四女は姉が住んでいる鷹司殿へ移った。その噂を聞き、道長は「かれをもがな」と思う。これを松村氏(三三)は「情人にしたいものだの意」と見るが、「殿の上」すなわち倫子が彼女の獲得に動いていることが述べられるので、ここは女房としての出仕を要請していると見るべきであろう。こ

の部分について、新編全集は頭注で次のように述べる。

この一節は〔八四〕で同じ内容が繰り返され、そこで、四の御方が道長に寵愛されたことが記される。ここは、この時点に置かれるべき必然性は乏しく、予告的な記事とみてよいだろう。『栄花』は道長と四の御方の関係を意外に重視している。(1:四三四頁頭注)

その〔八四〕に当たるのが、次の部分である。こちらは既に寛弘七年に年が替わったことが明言された後に位置しているが、そのすぐ前には具平親王の死亡記事(寛弘六年)が書かれ、年次の錯綜が疑われる部分でもある。このことについて、新編全集は「年季不明の記事や時間が限定されない状況記事を巻末にまとめることが多いためであろう」と分析している。

まこと、花山院かくれさせたまひにしかば、一条殿の四の君は、鷹司殿に渡りたまひにしを、殿の上の御消息たびたびありて、迎へたてまつりたまひて、姫君の御具になしきこえたまひにしかば、殿よろづに思し掟てきこえたまうしほどに、御心ざしいとまめやかに思ひきこえたまふ。家司などもみな定め、まことしうもてなしきこえたまへば、いとあべいさまに、あるべかしうて過ぎさせたまふめれば、院の御時こそ、御はらからたちも知りきこえたまはざりしか、このたびはいとめでたくもてなしきこえたまへりけり。(1:四五六頁)

この二度目の言及では、四女は既に道長家に出仕してしまっている。ま

た、ここでも「花山院かくれさせたまひにしかば」という語があつて、出仕に踏み切つた理由を花山院の死に求めている。待遇や兄弟たちの評を述べ、『栄花物語』は道長の所業に肯定的な言葉を並べている。これ以降、『栄花物語』に四女は登場しない。一方、『大鏡』では道長の子を産んだ後に死亡したというように、彼女のその後についても言及があつた。『大鏡』の記述は淡々としていたが、道長に対して批判的に見るならば、彼女は道長夫婦によつて使用人の身分に墮とされ、手籠めにされて孕まされた挙句死んだということになる。道長との子供が無事に育つたのか否かについて『大鏡』は曖昧だが、『小右記』長和五年正月二十一日の記事が彼女についてのものではあれば、死産の上に母体も助からなかつたということになる。

一方、松村氏が「宮仕えする太政大臣の女」として例示していた為光の五女の出仕は、『栄花物語』では、三条天皇の皇女禎子内親王が誕生した折に描かれる。巻は十一「つぼみ花」、年次は長和二年(1013)である。

月ごろさまさま参り集りたる女房の数など多かるべし。こたみは法住寺の大臣の五の君、やがて五の御方とてさぶらひたまふ。故関白殿の御女、対の御方の腹の君、この帝の麗景殿の尚侍の御はらからなるべし、また正光の大蔵卿の女、源帥の御中の君腹も参りたまへり。それも御匣殿になさせたまへり。(2:三四頁)

「こたみは」とあることから『栄花物語』は五女の女房出仕はここからであると文脈が伺える。『小右記』で「家子」になっていると確認

できるのが長和四年(1015)のことであつたから、『栄花物語』では、五女はその二年前に出仕した事になつてゐる。『栄花物語』での彼女はその後、三条天皇の中宮となる道長の次女妍子と、その娘である禎子内親王の周辺で宮仕えをしている。たびたび登場し、続編に入つてからも姿は見えるが、たくさんいる女房の中の一人として名前を挙げられる程度に留まり、彼女が大きくストーリーに関わるような場面は特にない。

このことから、史実ではなく『栄花物語』中に限つて言つと、松村氏が「宮仕えをする太政大臣の女」として指摘していた為光五女は、伊周が想定している「太政大臣の女」ではないことが分かる。卷十一の時点での妍子出仕が彼女にとって初めての宮仕えであるように書かれてゐるため、『栄花物語』の中に限つて言えば、彼女はまだ読者の念頭に上つてゐなかつたはずである。

■ 『栄花物語』における太政大臣の女

ここまで松村氏によつて指摘された為光女たちの出仕について諸記録や『栄花物語』での記述を確認してきたが、為光女の他に仕え人となつた「太政大臣の女」には、宮の宣旨(兼家女?)^(二二)、御匣殿(道隆女)^(二四)、一条殿の御方(道兼女)^(二五)などがある。前者二名はほぼ名前だけだが、道兼女は一つの物語のように詳細に記される。しかし、いずれも『栄花物語』内での女房出仕は寛弘七年より後とされている。阿部秋生氏^(二六)はこうした『栄花物語』の女房事情について、事例やその前後にある作者の意見を参照し、まとめている。以下そのうちの関係深いと思われる一部を抜粋する。

一 道長時代以前にも全くなかつたわけではないが、道長時代以後には、上達部・大臣の子女の出仕する者が非常に多くなつた。

二 (中略)

三 (中略)

四 (中略)

五 かうした現象が起るのは、いはゆる受領・諸大夫の子女の出仕希望者が減少したわけではない。むしろ増加の一途を辿つてゐたわけで、出仕したいと望む者の一半をしか採用しなくなつてゐる。しかも、それとは別に、上達部の息女の出仕を、半ば強制的に督促してゐる。

六 関白・大臣の子女の如きは、公的關係においては、為光の五の君・伊周女周子の場合に明らかなやうに、一般女房と何の相違もなかつた。

七 (四)の「二条殿の御方」の例によると、道長の北の方倫子が、道兼の姫君引き出しに一役買つてゐる。帥源中納言の姫君の場合には道長がかなり強硬な発言をしてゐる。この姫君達引き出しの一連の動きは、気まぐれなものではないし、その中心人物には、道長・倫子・頼通を考へて然るべきであらう。

これによると、『栄花物語』は、上達部の子女を女房に招聘することを道長家の施策だと見ることが出来る。道長「家」の施策としたのは、姫君たちを召致した人物は道長一人ではなく、倫子や彰子など道長家の様々な人物に設定されているからである。

こうした出仕要請を『栄花物語』は肯定的に見ていたのだろうか、否定的に見ていたのだろうか。伊周次女の出仕場面を見るだけでも、大臣家の姫君が出仕の要請に応ずるなどということ、本人や家族が喜んでいたりとはとても言い難い。しかしその一方、為光四女の出仕場面では父に代わって後見を務めていたであろう男兄弟たちの好意的な反応を描いたり、「御方」と呼ばれる特別待遇を強調したり、ネガティブになりすぎないような配慮も見え、判断は容易ではない。慎重な考察が必要となろう。

さて、ここまで「宮仕えする太政大臣の女」の例を探し、それぞれの『栄花物語』での記述を追ってきたが、伊周の遺言の時点で「宮仕え」を連想できる人物は、強いていうなら為光四女ということになる。しかしここで問題となるのが、伊周の遺言が具体的な人物として為光四女を想起させている積極的な根拠があるのか、ということである。内親王や太政大臣の娘などというのは単に例えであって、特別に思い浮かべてほしい具体的な人物を設定していないということも、もちろん考え得ることである。次節では、為光四女に殊更に注目させられるような仕掛けがあるのかどうかに加えて、当初の問題であった「具体的な人物を想起させること」と、それを踏まえた伊周の遺言の効果について考察する。

三、『栄花物語』の意図

■ 為光四女に注目させる構成

前節では、『栄花物語』での伊周の遺言にある「太政大臣の女」は、

藤原為光の四女が想定されているのではないかと述べた。本節では、『栄花物語』の構成面からこの点について考察する。また、残っている疑問点として、四女の出仕について少し離れた位置に二度言及があったことが挙げられる。その記述の内容や、二度言及している理由についても改めて考察していく。

この為光四女についての二度の記述や、伊周の遺言の位置関係を把握するため、巻八の巻末周辺の章立てを、新編全集から引用した(図1)。伊周をはじめ、中関白家に関わる人々の記事はゴシックで表記し、為光四女の記事は傍線を付した。

為光四女の伏線回収の関係

- | |
|---------------------------|
| [66] 伊周の嘆き |
| [67] 寛弘六年年頭 |
| [68] 彰子、再び懐妊 |
| [69] 彰子、懐妊により、退出 |
| [70] 為光四の君と道長 |
| [71] 頼通と具平親女王隆姫の結婚 |
| [72] 妍子東宮参入の準備と、城子の思い |
| [73] 伊周の周辺、敦成親王を呪詛 |
| [74] 彰子、敦良親王を生む |
| [75] 伊周の病悩 |
| [76] 妍子、東宮に参入 |
| [77] 妍子と城子の調度 |
| [78] 東宮、遣使、城子の有様 |
| [79] 伊周の遺言 |
| [80] 伊周家の人々 |
| [81] 伊周薨去 |
| [82] 濟時女中の君と敦道親王 |
| [83] 具平親王薨去 |
| [84] 道長、為光四の君を愛する |
| [85] 敦平親王の賀茂祭見物と、齋院の歌 |
| [86] 敦明親王と顯光女延子の結婚 |
| [87] 頼宗、伊周女大姫君と結婚 |
| [88] 彰子、伊周女周子を召す |

伊周遺言の伏線回収の関係

図1 伊周の遺言場面前後の章立て
(新編全集による)

巻八「はつはな」はその名の通り、道長の後宮政策の結実、すなわち

彰子所生の皇子誕生が話題の中心となる。後半はそれに加えて妹の妍子の東宮入内も加わる。そうした道長家について書かれたメインストーリー部分を削ぎ落していくと、伊周の遺言場面と薨去の場面の前後に為光四女の話が配置されていることが分かる。「予告」と言われているが、為光四女の出仕譚は、伊周の遺言と死をはさんで、後にその結果が語られており、伊周の遺言にあった「太政大臣の女」としてまさしく一致する人物が、遺言の前後に配置されているのである。伊周の遺言は当然その子女に向けてのものであったが、この構成を踏まえると、為光四女がこの遺言に無関係であるとは到底思えない。

ここで、当初の問題であった具体的な人物を想起させることについて考えてみたい。為光本人はもちろん太政大臣を歴任した貴族だが、その子女たちはというと、女子は前述の通りであるが、男子も四納言に数えられた齊信以外は振るわない。その齊信の隆盛も、言うなれば道長の傘下に入った結果のものである。つまり為光家は、伊周家と全く同じ運命をたどっていると言つて良いだろう。伊周家は後宮政策の中心だった定子とその妹である道隆四女（御匣殿）を続けて亡くし、伊周の死後、二人の娘は道長家に妻と女房という形で吸い取られてしまった。息子道雅もまだ幼く、唯一希望が残されているのは弟の隆家だが、彼は道長に取り入ることで没落を免れたのである。為光家も同様で、有望だった花山天皇女御の低子が亡くなり、残った娘たちは道長家の妾や女房となった。齊信も隆家と同じ選択をしたのである。

伊周の遺言は、そうした為光家の中でも四女に注目する形をとっているが、これは彼女が早くに伊周の懸念する「使用人に身を落とすこと」と「結婚で失敗すること」の両方を経験してしまったためと思われる。妹の五女もゆくゆくは同じ境遇になるが、伊周が遺言する時期に持ち

出すには早すぎたのであろう。為光四女は一人でその両方の境遇を得てしまった上に、前節の考察の通りならば、父の政敵であった道長の子を孕んだまま亡くなっていることになる。『栄花物語』がその死を描かないのは、道長の名譽に配慮してのことであつたか、それともその死亡時期と思われる長和五年正月に三条天皇が讓位し、いよいよ「はつはな」である後一条天皇の御代が始まるうとしていた時勢に泥を塗らないよう配慮したものか、あるいはその両方だったろうか。

いずれにせよ、先に指摘したように、伊周の遺言にある「太政大臣の女」は為光四女を想定していると考えられる。そして読者には、そのすぐ後に、伊周が心配していた自身の娘たちが為光四女と同じ境遇に身を落としたという結末が提示されるのである。

■ 「まこと」で始まる二回目

さて、次に問題となるのは、『栄花物語』は何故わざわざ二回「為光四女の宮仕え」について述べたのかということであるが、それに先立つて注目したいのは、二回目の言及が「まこと」という言葉で始まる点である。これについて、松村博司氏（こむら）は二度目の語り始めの「まこと」を「忘れていたことを思い出して書く場合に用いる」と述べているが、『栄花物語』が影響を受けているとされる『源氏物語』でも、これに類する「まことや」という語り始めの手法が用いられている。小林美和子氏（こばやし）は、「まことや」について「当時日常的に消息文や会話に使われていた形をそのまま模写して、物語や日記の世界へ持ち込んだ文型と、理解される」と分析し、「複線型に分析された叙述部分の流れを整理しながら、主流・傍流の位置関係をも、明確化する機能を果たしてい

る」と述べる。つまり、「まことや」で叙述された部分は、一旦間を置いた事柄を再び取り上げたり、漏れた事柄を拾ったり、後日談だったりといったニュアンスの記述であり、想起される人物は物語の傍流に位置付けられる人物であるということである。

これは『源氏物語』での用法であるが、『栄花物語』ではどうだろうか。新編全集の本文によれば、話題の転換や付け足しなどの語り始めで用いられている「まこと」及び「まことや」は、管見の限り正編で一二例、続編で一三例見られる。この割合の差から、正統では何らかの事情で文体が変わっていることが伺えるため、今回は正編のみに注目する。

正編の一二例で「まこと」「まことや」で想起される側の人物を列挙すると、祐姫（藤原元方女）、藤原公季、恭子齋宮、選子大齋院、藤原有国、為光四女、藤原斉信、藤原実方、弁の乳母の姪、藤原公信室、殿の宣旨の女、藤原師房室、藤原長家である。最後の長家以外には道長の家族はいない。その長家も道長の息子ではあるものの、明子腹であり、やはり彼らは物語の中心になるような人物ではない。『源氏物語』では「まことや」で語られる人物は物語の傍流に位置するという小林氏の説は『栄花物語』にも適用できるだろう。そのうちの一人として、「まこと」で語り出される為光四女も「傍流」にあたる人物であると考えられる。

卷八は道長・伊周の両家が交互に話題に上り、その明暗が描き出されるという構成^(二九)になっていることは前述の通りであるが、為光や済時、顕光といった他の有力貴族の娘たちも時折話題に上る。特に妍子の東宮居貞親王参入に関わる場面では、十年以上連れ添って多くの子を成している済時女次子がたびたび言及されるのだが、卷八全体を見渡したとき、やはり伊周家に比べると注目度は低い。しかし、卷五「浦々の別」で伊周・隆家兄弟の左遷が物語の中心だったところに比べると、

徐々にその注目度の差は埋まってきている。確実に中関白家への注目度は下がっていると云わざるを得ないだろう。

また、吉海直人氏^(三〇)は前掲の小林氏の研究を受けて「まことや」と六条御息所に注目し、「夕顔」の巻では夕顔が「まことや」で想起される傍流の女性であるのに対して、「六条のわたり」が主流の女性として想定できることを述べている。また吉海氏は、そのように「夕顔」の巻では主流として位置づけられる六条御息所だが、「葵」の巻では今度は立場が変わり、「まことや、かの」が使われる側になることも指摘している。

これに対して、卷八「はつはな」にもこの本流傍流の関係がと考察された場合、「本流」に相当するのは誰であろうか。『栄花物語』の中心が道長の栄華であると考えられるならば、卷八での主役は当然道長と、巻名の「はつはな」である皇子を生んだ彰子であろう。だが、その陰にはやはり明暗として対になる中関白家の存在があり、伊周やその眷属を無視することはできない。思えば、『源氏物語』でも主流と見なせる人物は一人ではなかった。「夕顔」の巻では若紫はまだ物語に登場しておらず、藤壺にも特段言及がなかったため、傍流の夕顔と主流の「六条のわたり」のほぼ一対一だったが、「葵」の巻に至ると、主流と見なせる人物は、後世に巻名を冠されることになる葵の上だけではない。若紫は巻末にならないと新枕を交わさないので「女君」とは呼ばれないが、同巻の端々で溺愛されている様が描かれる。もちろん巻末になれば立派な「主流」の人物の仲間入りをしているが、それ以前から彼女は主流の人物と見なせるだろう。この二人は直接対峙することはないが、「紅葉賀」の巻では源氏が若紫を迎え入れたとの噂を聞いて葵の上が思い悩む様子が描かれるように、当初から潜在的に光源氏をめぐってその愛情を争

う関係にあった。

このように、本来、本流の人物たちには本流同士の間関係があつて、そもそも傍流など相手にならない。だからこそ傍流なのである。『栄花物語』でも、傍流に位置する為光親子は、本流の人間関係を構成している道長親子や伊周親子と比べられることなど、本来はなかつたはずである。しかし伊周が亡くなり、その娘たちも伊周の遺言の通りに身を落とすことになった。そして、大姫君の結末は「かの」で語り出されている。それは「まこと」で想起されるような傍流の人物と全く同じ立場である。そのことをはつきりと意識させるのが為光四女の二度目の言及なのではないだろうか。

■ 二度目の言及がもたらすもの

これまで、為光四女が二度話題に上る理由は、新編全集で「予告的」と表現されるように一種の伏線回収のように見られていたが、逆に「この話題を出したいタイミングが二度あつた」と考えてみるとどうだろう。

一度目の言及は、伊周が遺言で述べる懸念が実際に起こり得ることの具体例を先んじて述べたものであるだろう。これはつまり、伊周の懸念は誇大妄想ではなく実際に起こることなのだという例が先に示されていることになる。そして伊周の遺言後に、二度目の言及で改めて為光四女の正式な出仕が書かれることによって、伊周の読みは間違っていないなかつたことが示される。更に、為光四女の出仕にさほど間を置かず伊周女たちの顛末が語られることにより、ただ「伊周女が没落した」という事実だけでなく、傍流の人物として語り出された為光四女と同じ

境遇になつたことを読者に印象付けるのである。

『栄花物語』での伊周は、家督を継いだ道隆の死の前後では、政策の迷走など未熟な様子が強調されていた。その一方で、本人の死の直前に至ると、自分の運命を嘆きながらも、残していく家族の今後を的確に予想して訓戒を残す姿が描かれる。しかし当然ながら後の祭りであるし、物語において、そうした訓戒は破られるためにあると言つても良い。『栄花物語』は、伊周を「愚かな人物」で終わらせることをしなかつた一方、その死後、中関白家の子供たちを物語の中心から退場させ、「その他大勢」となつた事実を描き出しているのである。

おわりに

本稿では、伊周の遺言の内容の一節に注目し、その前後文脈から、「宮仕えをする太政大臣の女」の具体的な人物像として為光四女を読者に想定させる構造があつたこと、また、物語の傍流の人物を想起させる「まこと」という語よつて、為光四女は『栄花物語』の文脈の中で傍流に位置する人物に設定されていることを述べた。そして、後に続く伊周女たちの顛末と絡み合い、伊周女たちは遺言を破つたというだけでなく為光四女と同じ境遇になつた、つまり物語の中心からの退場を印象づけるものだったのでないかと考察した。

巻八「はつはな」は一条天皇が讓位を考える場面で終わり、次の巻九「いはかげ」は天皇の病と讓位で始まっている。この二巻の境目は、物語の大きな節目となっている。その節目の一つとして、伊周の遺言は、彼自身の物語からの退場だけでなく、その子供たちや家全体、更には、同じ境遇にあるその他の家々の様相に読者の目を誘導している。

この遺言は『栄花物語』にしか見ることができない。これが物語を劇的にするための『栄花物語』による創作であるのか、それとも事実は小説より奇なりて、伊周が実際に言ったものであったか。そうであるならば、如何なる方法で伝わり、『栄花物語』に組み込まれたものか。残る疑問は多々あるが、それはまた別の機会に譲ることとする。

注

- 一 松村博司『栄花物語全注釈二』角川書店／一九七二 卷八解説五八七～五九一頁
- 二 小田勝『実例詳解古典文法総覧』和泉書院／二〇一五
- 三 大日本古記録『小右記』小記目録下 第十七禁制事「長徳元年七月十五日、御衣袖令縫縮給事、…」とある。
- 四 『栄花物語』卷三十六「根あはせ」で、花山院の乳母子腹の内親王が彰子に宮仕えをしていたことが語られる。
- 五 新編増補国史大系『公卿補任』一条天皇 正暦三年(992)
- 六 『尊卑分脈』隆家の子季定は「母恒徳公女」とある。(新訂増補国史大系『尊卑分脈』第一篇 吉川弘文館／一九五七)
- 七 新編増補国史大系『日本紀略』後編十 吉川弘文館／一九六五
- 八 新編増補国史大系『権記』長徳四年(983) 十月二十九日
- 九 大日本古記録『小右記』長和五年(1016) 正月廿一日
- 一〇 大日本古記録『御堂関白記』長和五年(1016) 正月廿一日
- 一一 大日本古記録『小右記』長和五年(1016) 六月十五日
- 一二 松村博司『栄花物語全注釈二』角川書店／一九七二 五二五頁

- 一三 卷三「さまざまのよろこび」に「殿の御女と名のりたまふ人ありけり。殿の御心地にも、さもやと思しける人、参りたまひて、宮の宣旨になりたまひぬ」(1… 一四〇頁)とある。
- 一四 卷十一「つぼみ花」で、禎子内親王の女房たちの中に「故関白殿の御女」(2… 三四頁)とあった人物。為光五女の同僚。
- 一五 卷十四「あさみどり」で、「なにかと思すべきにあらず、つれづれの慰めに語らひきこえせん」(2… 一四二頁)と倫子から声が掛かる。
- 一六 阿部秋生『源氏物語研究序説』東京大学出版会／一九五九 四五二～四五三頁
- 一七 松村博司『栄花物語全注釈二』角川書店／一九七二 五七三頁
- 一八 小林美和子「複線型叙述の物語構造に於る効果」『国語と国文学』五二、二二／一九七五
- 一九 注1参照。
- 二〇 吉海直人「六条御息所と「まことや」『源氏物語の人物と構造』笠間書院／一九八二

(にのみや あいり・本学大学院博士後期課程)